道徳のまち笠松の
# ささえ合い通信 No.5 新成人の集いを支えてくださった創造集団『Do』の皆さん

1月10日、新成人の集いが中央公民館で盛大に行われました。会場には、新成人の晴れやかな姿や弾けるような笑顔がホール一杯に広がりました。その式典を裏方として支えてくださっていたのが19人の創造集団『Do』の皆さんです。

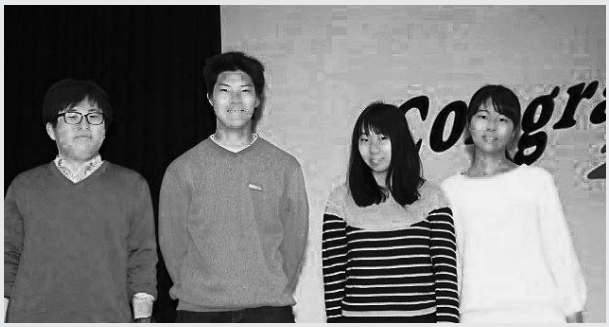
『Do』は昭和58年社会教育視聴覚協議会として発足し、平成6年に『Do』と改称されました。

「音響や照明の費用の問題で隔年しか開けない発表会も、手助けをすれば、毎年開けるようになるかもしれない」そんなボランティア精神が活動をはじめた動機だそうです。

『Do』主宰の河合秀三さんには、常々「若い団員を募りたい」という思いがあり、今の団員の中には4人の高校生がいます。その高校生に「なぜ『Do』に入ったの?」と尋ねたところ「仕事がおもしろいから。」「役に立っていることが実感できるから。」という、頼もしい答えが返ってきました。

新成人の集いのほかにも『Do』の皆さんに支えられている町内のイベントは数多くあります。

温かいボランティアの心が文化豊かな笠松町をつくっています。



高校生メンバーの道家さん・荒木さん・金森さん・竹嶋さん（写真左から）

『Do』の皆さん、ありがとうございました

## かさまつの民話「昔むかし」
## かせくり ③

木曽川の堤防へあがると、冷たい西風がほほをうった。

ガタガタ、ガタン

じゃり道を行く藤車の音を聞きながら、ふさは、夕べの母のことばを思い出していた。

「お正月には、おこずかいで何を買おうかなあ。また、綿菓子を買おうかしら……。」

お盆に食べた綿菓子のあまくてふんわりした口ざわりが、きのうのことのように思い出されてきた。おやつといえばいり豆ぐらいのふさにとって、綿菓子は大変なごちそうであった。

「やっぱし、あのてんまりがほしいな。でも、おこずかいで買えるかなあ。」

お盆の時に出店で見た、青と赤のもようが美しいてんまりのことが頭にうかんできた。三十銭もしたのでとても買えず、ふさは、そのてんまりをいつまでもながめていたのである。

いつの間にか、笠松の港のそばにさしかかっていた。川面には、大舟や小舟がいく隻もうかび、荷あげをする人や大八車を引く人などで、とてもにぎわっていた。ふさが枠をとどける機屋は、港を通りこした堤防のかたわらにあった。

（つづく）